

日本初のオフィス街「一丁倫敦」を丸の内に誕生させた偉人

曾禰達蔵

Tatsuzo Sone

「一八五二年～一九三七年」

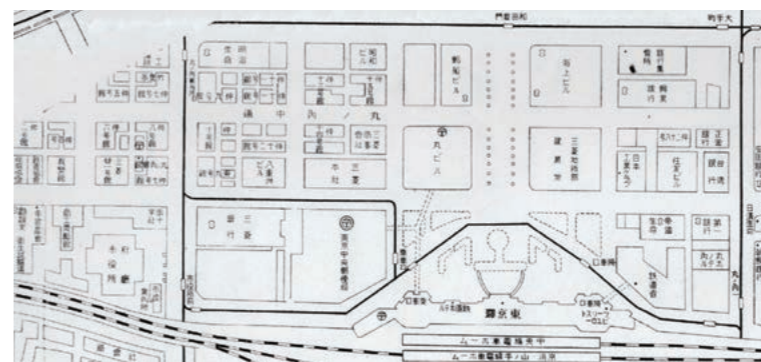


明治末期の丸の内。一号館以降、馬場先門通り沿いには赤煉瓦のビルがいくつも建設され「一丁倫敦」と呼ばれた。

江戸時代、丸の内一帯は諸大名の屋敷が並ぶ城下の中心地であった。その大半は明治初頭の大火で焼失したが、残った家屋は官有地となり陸軍省練兵所の兵舎に転用された。やがて軍が移転し廃屋の並ぶ荒野野原となったが、明治23(1890)年、三菱社(後の三菱本社)がこの土地を買い取った。彼らはここにロンバード街(ロンドン金融市場)に倣う一大経済拠点を築こうと計画していた。

そんな三菱による丸の内開発を支えたのが、建築家・曾禰達蔵だった。彼は嘉永5(1852)年、唐津藩士の家に生まれ、明治12(1879)年に工部大学校造家学科(現・東京大学工学部建築学科)を一期生として卒業した。その後は工部省、海軍省の建築技士などを経て、明治23(1890)年に大学校時代の恩師ジョサイア・コンドルの推薦で三菱社に入社し、以降丸の内のオフィス街での建築に携わる。

皇居のお膝元である丸の内を、三菱は洋風の市街地で飾ろうとした。そこには日本の文明開化を国内外に知らしめるという意図があった。明治27(1894)年竣工の一号館を皮切りに、次々と建築を行った。立ち並ぶ赤煉瓦造の建物には銀行、商社、保険会社などの企業が入居し、街路を実業家が往来する。英国さながらの情景に、「一丁倫敦」の愛称が付いた。日本におけるオフィスビル運営の原型、ビジネス街の黎明が、ここ丸の内にあった。



オフィス街として完成した後の丸の内界隈区画図(昭和初頭)。曾禰達蔵の「一丁倫敦」(左上一帯)とともに皇居のお膝元を彩ったのは、同郷にして大学校時代の同期・辰野金吾が設計した東京駅(中央下)だった。[提供:(一社)ジャパンアーカイブズ]

曾禰は建築の本質的な価値を追究した人だった。彼は建築様式を純粹に踏襲することに全く意味を見出さない。彼が善しとしたのは、現実の要求に比べ得る、日本の風土に適した建築だった。

そのため曾禰は、丸の内一帯の建設に際して土地の調査に余念がなかった。彼は、当初設計者コンドルの下で三号館までの工事監督を務め、次いで四から七号館までは設計を担当した。以降は後任に託し自らは建築顧問となる。そして、これらの建設で彼の思想は如何なく発揮された。

例えば当時民間では珍しかったボーリング調査を敢行し、コンドルによる耐震設計の実現を助けた。また曾禰自身の設計においても、配水管の大きさから道路断面図に至るまで詳細な構想を図面に記し

ていた。彼は土地の条件と建築が合致することに、細心の注意を払っていたのだ。

そんな曾禰が現場主任を務めた一号館は関東大震災すら耐え抜き、昭和四十三(一九六八)年に解体されるまで、オフィスビルとしての使命を果たし続けた。そのほかの館についても、そこで働く社員はその社屋で働けることを幸福に思っていたほどだったという。心地よく使われ、使う人が喜びを味わう建物を目指した曾禰の精神が丸の内の繁栄を支えたと言っても、過言ではない。

以来、丸の内にある社屋は絶えず働き手にとっての最善の姿を模索し、更新されてきた。「一丁倫敦」で曾禰が目指したオフィス街の姿は今日、日本経済の中軸を担う各地に広がっている。

日本有数のオフィス街、丸の内。かつてここは「一丁倫敦」と呼ばれる、西洋建築が並ぶ前衛都市だった。その名残を今に伝えるのが、「三菱一号館」である。現在は美術館として利用されている復元建築だが、元は明治二十七年(一八九四年)に竣工した日本初のオフィスビルだ。ここから、丸の内は西洋諸国に肩を並べる一大経済拠点へと成長していく。